

# 5 墓地空間の創造



関野 らん  
SEKINO Ran

株式会社SRAN DESIGN/代表

現代の多様化する価値観の中、墓地においても人々のニーズに合わせた様々な形式のものが見られるようになってきた。本来の墓地空間に求められる要素を残しつつ、現代のライフスタイルにマッチした新たな墓地空間の創造について、設計する立場からその思いも紹介する。

## 墓地とは

現在の墓の形式として一般的な、墓石を建て仏教の様式で故人を供養するお墓のかたちは江戸時代から始まったと言われていて、それ以降墓は家単位で作られ、先祖代々の墓を家とともに継いでいくものでした。それが昨今、宗教離れや少子高齢化による家族の形態の変容、ライフスタイルや価値観の変化により墓地の形態も変化し、現在では樹木葬墓地や屋内のロッカー式墓地から散骨まで様々な形式のお墓が新たに作られています。

以前は墓地の設計を設計者が行うことは少なかったのですが、新たな形式の墓地の出現により建築家やデザイナーが墓地や納骨堂、墓石のデザインなどにも関わることも増えてきました。元来、土地ごとの慣習や宗教の儀礼にしたがって作られていた墓を新しいかたちに変えるということは、単にデザインを提案するだけでなく、法要や儀礼の形式などソフト面も同時に考える必要があり、墓地が人にとってどんな意味を持つのか今一度見つめ直す必要があります。

墓地は亡くなった方の遺骨を埋葬する場所であり、埋葬された故人を想い弔うことが一番の目的です。その上で、故人との対話を通じて自分自身を見つめなおす場所でもあり、先祖代々の墓を前にすると自分のルーツを感じるものです。さらに、お墓は死という側面だけを切り取る

ものではなく、人が自然とどう対峙し生きているかを表すものでもあります。

墓石が建てられる以前、遺体は衛生上の問題からも集落から隔離された特定の場所に遺棄または埋葬されていました。その場所は土地の地形的特徴や生業と密接に関係し、「亡くなると『生』の場所から離れ、手の届かない『死後の世界(自然)』へ行く」という空間の分離により、そこから死生観が確立されていました。お墓は“生業”“自然環境”“死生観”の3つの要素がリンクしてつくられていたのです。

このように、お墓は先祖とのつながりや自然との連続性を表すもので、人間の存在が一人で完結するものではなく、そこからつながる祖先や子孫という時間の大きな



写真1 「風の丘樹木葬墓地」の全景



写真2 周囲の地形と溶け込む樹木葬墓地



写真3 法要所から墓地を眺める

流れや、自然へとつながる空間的な広がりなど、時間や空間の連続性の中に存在していることを感じられるものなのです。人はだれしも一人ひとりがかけがえのない存在であると同時に、周りの人とつながりの中で生きています。また、今の自分という存在は、先祖から続く人間の長い歴史の連続性の中にあります。環境とつながっている実感とその中にある自分の存在、広い世界とそこにいる自分、「連続性/全体性」と「個別性」、それを感じられる墓地に対峙したとき、人は故人を想うと同時に自分自身が生きている実感をより強く感じるができるのではないのでしょうか。

## 個別性と連続性の共存

墓地の設計においては、従来のお墓から知らぬ間に感じられていたこのような連続性を感じられるお墓を目指しています。2018年に完成した東京都八王子市の『風の丘樹木葬墓地』では、「個別性」と「連続性/全体性」を時間的・空間的に幾重かのレイヤーでゆるやかな境界をつくるよう設計しました。

### ① 大地との連続性

敷地は八王子市にある慈眼寺境内で、高尾山からつながる多摩丘陵の一部にあり、50年ほど前に住宅造成により山が切り取られた場所です。高台で見晴らしがよく、空が開けて見えて風が吹き抜ける心地よい所でした。敷地の地形的特性を活かし、周囲の地形の一部であり地球と一体化したものと見えるように形づくることを考え、平坦な敷地に石のモニュメントを骨格として周



写真4 芝生で覆われた埋葬エリアと石のモニュメント

囲の丘陵の力で押し上げられたようなゆるやかな丘をつくることを考えました。

丘を形づくる石は、曲率の違う複数の円弧上にずらして配置し、境界線を完結させずに、丘が周囲の地形と溶け込むようにしています。丘は芝生で覆い、遺骨を埋葬するエリアの周りには水を流し、それが境界となって水で囲われた内側は神聖な場所であることを暗示しています。そうやって埋葬エリアが「個別性」を持つ特別な場所であると同時に、周囲の地形と「連続性」を持つように形づくりました。

### ② 時間軸の中での連続性

埋葬エリアの大きさは縦52m、横35mの楕円に近い形で広さは約1,100m<sup>2</sup>ほどです。そこには35cm四方の埋葬区画が格子状に約3,600配置され、それぞれの区画に最大2名まで埋葬されます。格子状に配置された区画は、位置をGPSで管理していて、区画の境界に構造的な仕切りはありません。埋葬時には区画に円柱状



写真5 お参りする方々



写真6 ガラス張りの法要棟「飛翔殿」と樹木葬墓地



写真9 樹木葬内の通路の両側に銘板が配置されている



写真10 法要棟「飛翔殿」と樹木葬内の通路



写真7 献花台を囲む水面



写真8 献花台

の穴を掘るため、芝生に円形の穴の跡が残ります。その芝生の跡によりしばらくは区画の位置を遠くからでも見ることができですが、時間とともに消えて周囲に馴染んでいきます。

お参りに来た方が最初は穴の跡を見て「あそこに眠っているんだ」とその場所一点の「個別性」を意識しますが、それが徐々に消えていくと同時に「土に還っていったんだ」と周囲との「連続性／全体性」を感じ、納骨からの時間軸の中でも意識が「個別性」から「連続性／全体性」へと変化していくことを考えました。

### ③ 献花の仕方

墓石のお墓では花束を2つ両側に献花することで、花もお墓もより一層きれいに見えます。つまり献花した状態でデザイン上も完成するのが好ましいかたちです。しかし、同じエリアの中に3,600区画もあるこの場所では、全ての方が花束をお供えするための献花台をつくるのは難しいですし、花束だと数が多く重なりすぎて雑然と

してしまうでしょう。

そこでこのお墓では水を張った献花台を埋葬エリアの周りに3カ所配置し、そこに合同でお花の部分だけを水に浮かべて供える形式を提案しました。より多くの人々が来て多くのお花が捧げられたときにこそ、お墓がより一層美しく見えるこの献花形式は、一人ひとりのお花をあげるという行為の「個別性」が全体を美しくする「連続性」へとつながることを意図しました。

### 100年の継承を見据えたデザイン

墓は一度つくられたらできるだけ永く、できれば100年以上受け継がれることが重要です。現在樹木葬墓地という形式は新しい墓地のかたちとして注目されていますが、それが一時的な流行ではなく永く受け継がれるものになるには、デザインによるハード面とともにソフト面も従来の仏教の作法に寄り添うものでありつつ、宗教離れをしている現代の人の心にも、違和感なく受け入れられるものとなる必要があります。『風の丘樹木墓地』

では埋葬形式や献花の方法などがデザインとリンクし、ソフト面とハード面が一貫性を持ち、初めてこの墓地に来た人にも新しい形式が受け入れられやすいように留意して設計の検討を重ねてきました。

この墓地がもし100年後まで受け継がれ、未来のこの場所に立った人が「100年前の人もここに立っていたんだ」と歴史の連続性のなかに自分がいることを感じてもらえたら、家単位で墓を継ぐことが難しくなった現代でも、地縁血縁関係によらず時代を超えた人のつながりが作られるのではないのでしょうか。そしてそのような墓は、そこに自分の先祖や知り合いが埋葬されているかどうかに関係なく人の心に寄り添える場所となり、その空間自体が文化的な遺産となるのではないのでしょうか。

### これから求められる屋外空間のかたち

2019年末に中国で発生した新型コロナウイルスは世界100ヶ国以上に広がり、日本では2020年4月初旬に緊急事態宣言が出され、東京をはじめとするいくつかの都道府県では外出自粛要請により、不自由な生活を余儀なくされました。政府から「新しい生活様式」が提示され、人との交流は一定以上の距離をあけることが推奨されています。今までは多くの人と同じ時間と空間を共有することで様々な楽しみを感じることができましたが、人が集まり賑わうことが良いとされてきた都市は一気に転換を迫られる状況となりました。

人と会うことが難しい状況下で実感するのは、「やはり人は人とのつながりを求めるものである」ということで



写真11 樹木葬内の通路を歩く

す。人が「密」に集まるのが難しい生活の中で、「疎」であっても人とのつながりを感じ、心が落ち着ける場所が必要とされるのではないのでしょうか。

墓地はそうなりうる場所の一つではないかと思えます。同じ時間にたくさんの方が集まっていなくても、場所を通して同時代の人たちとも前時代の人とも、より多くの人との繋がりを感じられる場所になりうるでしょう。人が賑やかに集まる場所とは違う、静かに物思いに耽って心が落ち着き、その上で人や環境とのつながりを感じられるような、心の拠り所となる「静かな空間」が今だからこそ求められるのではないのでしょうか。今後も、少しでも人の心が安らぐ場所を設計できたらと思っています。

<写真提供>  
写真1、2、3、10 株式会社エスエス  
写真4、5、11 山田裕貴  
写真6、9 川口宗道  
写真7、8 吉成大輔